

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理をしています。

講 孟 餘 話 を 讀 み て

石 飛 俊 道

一、本書の價值

本書は憂國の志士吉田松陰が海外遊學を志し、國禁を犯して決死踏海を企てしも、雄圖虚しく破れ、野山獄に幽せらるゝ身となつた。憂國の信念に燃ゆる松陰は、沈黙を守る能はずして同囚を相手とし彼の喜樂憂怒に當つて「孟子」を講じ、隨話隨錄して卷を成したもので、唯講孟の餘話のみ言つてゐるが、その内容に立入つて見れば、單に一喜一憂をこの書に寓したに過ぎないとは彼の謙遜の語にして事實に於ては、忠實に本文を辿りながら、各章の主旨を簡潔に把捉し、殊に前後思想の流れる關係を究め論理の發展を追従して本末前後を明らかにしてゐる點は注目すべきであり、それが讀書法の指導的意味を持つことは言ふ迄もない。一例を舉げて見るに、勝文公上篇を講じ終つて次の如く結んでゐる

る。

「上篇凡そ五章此篇王政を論ずること最も詳なり。就中第三章は王政の正面なり。第四章は許行の異説を破るなり。而して王政は親に孝するを以て本とす。親に孝するは終を慎しむを以て要とす。因て第二章先づ三年の喪を論じ起し、第五章墨者の異説を破り結とす。其首章に於ては、學問政事皆聖人を以て師とすべきことを論じ、全篇の發端とす。是上篇五章の脈絡なり。」

こゝ、内容的解釋よりも寧ろ受取る態度の上に教育的に大きな意味がある。實に彼が「孟子」を語りながら常に日本を語り、時代に論及し自己一人に沈潜し行く求道の青年の姿が鮮かに見えて居り、松陰を知らんとする必須第一の文獻である。松陰が獄中又は幽室にあり、志士の活動から教育的事業に移り行く過渡期に屬し、思想的に最も豊かな收穫をなし得た時期にして、彼の生動せる思想に於て理解せんとするとき、最も有力な手がかりとなる貴重な文獻である。先づ學問の態度を吟味し、主として國體論及び教育論を窺つて見たいと思ふ。道德論は隨所でその要點に觸れることゝならう。

二、學問の態度

學問は唯學問といふ理由で無條件に尊いとは言へない。凡そ學を爲す者は何のためにするかその「初一念」に於て確立すべきである。この初一念の如何が學問の眞偽の分岐點となるのである。當時學問をなす自稱する青年は、多くこの初一念に既に誤つてゐる。こゝを「今の士大夫學を勤むる者若し其志を論ぜば、名を得んが爲に官を得んが爲に過ぎず。然れば功效を主とする者にして殆んど義理を主とする者異り、思はざるべけんや……」（二〇）と、初一念名利を目的とし學問を手段とせば、よき現實的手段あれば、學問は迂遠となり、或は權門勢家に阿諛追從に至るなく、時に贈賄なごの醜事實をも敢てして愧ぢざるに至るのである。松陰は當時の情況から再び世に出る希望を抱くこゝ

困難なる同囚に向つて、言ふに「人ミ生れて人の道を知らず、臣ミ生れて臣の道を知らず、子ミ生れて子の道を知らず、士ミ生れて士の道を知らず、豈恥づべきの至りならずや……朝聞道、夕死可矣」(二〇)ミ、如何にも痛切に讀書の功效を論じてゐる。凡そ學問は人間が自らを眞の人間たらしめんミするもので、之即ち學問の第一義なり。士氣七則の第一則にある如く、「人の人たる所以は忠孝を本ミなす」の趣意を言ひ現したるものならん。かくて人間の社會的關係たる五倫ミ五常を結合し、兩者の一致を認めて唯一元なりミした。この一元の道が、人倫の様々な關係の中に具體化し、即ち特殊化して道徳が成立する。之を「徳ミは此道を行ふて心に得ることなり。業ミは此道を行ふて成功あること也。誠ミは此道を專一眞實に行て息まざること也。敬ミは此道を奉持慎重して捨てざること也。善ミは此道に善なる也、才ミは此道に才なる也。聖賢千言萬語、豈復た此外あらんや。實心實行なき者は、道を以て多端ミす。余は則一條の大路ミなす。」「二六二」ミ、統一的見地から彼の獨創せるものである。學問の要はこの道を求め、心に得て徳の人ミなるに在る。そこに正しき學問をすることが必須條件ミなる。松陰は學を正學ミ曲學ミに分ち、人倫五常の義理を明らかにし、經世濟民の道を教へるを正學なりミし、修己・治人は別のものでないミ、之即ち眞の學問は、その志ミするところが佛教で云ふ菩薩道の如く、修己治人の一元觀を主張してゐる様である。故に「學を言へば志を主ミす。其曲ミ正ミに至つては第二義に落つるなり」(三〇)ミ云つてゐる。かゝる眞の學問をなす手段はといふに、讀書ミ自己反省が重要な意味を持つ。書は聖賢の體驗の記録で、實德實材の相にして、この書によりて著者の生活を知り、人倫の理を明らかにするにあり。然らば讀書の態度如何は、虚心坦懷にして獨斷偏見を離るゝにありミの態度であつた。そのためには學派に拘泥せず、あらゆる方面に求め、飽く迄も眞理を追求するのが眼目であつた。且從來される聖人の偶像崇拜的態度を排斥してゐる。松陰は日本人ミしての行動を中心に置いてその指標を求むるミき、孔子や孟子が生國を離れて他國に出でゝ事へるミを以て、あるべからざる不道德なりミ評してゐるのを見ても、自らの求むる態度の眞摯さが、

かゝるところ迄論及せしめたのである。隨所に聖人を讃仰してゐるのは、それらの人々も、自己の個性を照らして修徳の工夫をなすべしと、自らは「抑下惠を主とし、是を輔するに伯夷を以てせん」と欲す。是余が志なり」とも云つてゐる。かゝる見地から尙古主義的立場を排して、卓然として日本人である自分の道を求めんとの態度は、實にこの書の眼目に於いて、松陰はその短生涯を全く國家に捧けつゝ終つてゐる。その間なした事の中には、缺點もあり、未熟な點もあつたが、その熾烈な憂國報公の精神の純一なるものがある。この書もかゝる精神の躍動途上の産物であるから、到る處にその態度が窺はれる。士氣七則の第一則にある忠孝が、我國民道徳にして我國に於ける人たる所以は忠孝にある。故に「忠孝の念あらば文學も修むべし、武藝も講ずべし、武器も蓄ふべし。……忠孝の念なき者をして文武を講修し武器を蓄へしめば却つて害となり、其身を全うすること能はざるの基」(五五)と斷言してゐる。彼の態度の確立するところ、如何なる外來思想も彼を毒することは出来なかつた。かの孟子の民主主義的政治思想は、我國體と相容れず。その章を講ずるに當つて、我建國の歴史を回顧し實祚の尊貴を述べ、更に國土山川草木人民は皇祖以來保守持護せられて今に傳へられたものである。所以に及び「天下より視れば人君程尊き者はなし。人君より視れば人民程貴き者はなし。此君民は開闢以來一日も相離れ得る者に非ず。……此義を辨ぜずして此章を讀まば、毛唐人の口眞似して天下は一人の天下に非ず、天下の天下なりなき、罵り國體を忘却するに至る。惧るべきの甚しき也」(二五二)と論じてゐる。かくしてよく毒を變じて藥となし、我國體の精華をそこに見出し行く彼の消化力の強きこと驚くべきものがある。

三、國體論

次に國體論に就いて述べん。松陰の國體觀の大轉回を確實になし終つた安政三年八月に先立つ二ヶ月にして完成したもので、已にかの大轉回の可能を十分に孕んでゐるといへる。尤も別に國體を組織的に研究した書物ではなく、國民的

自覺の道程中にある松陰が、心中に生動する我國の姿を、折に觸れ、事に感じて表明したに過ぎない。理論的討究でなく寧ろ國家の隆泰安危を自ら荷つて立たんとの實踐的態度が見出し得た國家の姿である。故に自己の責任に於て國家を問題とする。「孟子」第一篇の梁の襄王が孟子に「天下はいづくにか定まらん」を問ふた。その問を問題として國家の大問題を、恰も自國に關係なき第三國の事件の如く、世間話の如く取扱つてゐる點を難詰してゐる。さて人倫は主として踐み行ふ道にして「君臣父子夫婦長幼朋友五者天下の同なり。……然れども道は惣名なり。故に大小精粗皆是を道と云ふ」を、道を外れて人間界はない。之天下共通の眞理である。然るも之山縣本華が云ふ様に「道は天地の間の一理にして、其大原は天より出づ。我人との差なく、我國と他の國との別なし」の説は、抽象的なりとして之に對して「五大洲公共の道あり、各一洲公共の道あり、……故に一家にては庭訓を守り一村一郡にて村郡の古風を存し、一國に於ては國法を奉じ、皇國に居ては皇國の體を仰ぐ。然る後漢土聖人の道を學ぶべし、天竺釋氏の教をも問ふべし。……彼の道を改めて我道に従はせ難きは猶吾の萬々彼の道に従ふべからざるが如し」（二七五）を反駁してゐる。國體なる語を用ひしその國體とは、自然的存在としての國俗に即してその存在の理想を掲げたもの、即ち國家のあるべき姿である。故に具體的には「皇朝君臣の義萬國に卓越する」を云つた。治まれる御代には君臣の大義が、國民生活の隅々に迄行き互つてゐるが、亂臣賊子でも、この國體に關係して各國により異つた形態をこつて現れる。極端な例なるが、松陰は「尊氏も雖も敢て臣道を去らず」を、かゝる不忠不臣の行爲も朝廷を憚り、朝敵の名を避けんと努めた。松陰に依れば、我國體は神代の神話に於て見るべきで、合理主義者が神話を荒唐無稽の説なりとするに對して「皇國の道は悉く神代に原けば、則ち此卷臣子の宜しく信奉すべき所なり。其の疑はしきに至つては闕如して論ぜざることを慎みの至なり」といふ。かくて日本書紀の説に従つて「大原の神を國常立尊とし、伊弉諾・伊弉冊尊に至り國土山川草木人民及び天下の主たる皇祖天照大神を生み給ふといふ神話を信じ、……それが列聖に繼承せられ保守持護せられて今日に及んでゐる」

又「漢土は人民ありて然る後天子あり。皇國は神聖ありて然る後蒼生あり。國體固より異なる」云、松陰は國生みの神話と歴史の連綿たるところにあるので「辱くも二尊に生んで貰つて日神に教へ且治めて貰つて天壤と窮りなきもの」云、君恩無窮といふところに感謝してゐる。

次に儒教に三恩説あり、佛教に四恩説がある。松陰は僧日命より四恩説を聞かされたが、彼は儒教の立場から三恩を離れて豈衆生の恩ありや、三恩の外更に衆生の恩ありとは所謂二本の説なり」と批評して、三恩を君恩に一元化し、衆生の恩を立てるは二元論なり云ふも餘りにも言過ぎた言にして、衆生の恩にて我國民として考ふるときは、同じく君恩に歸するものにして、何ぞ二元論ならうぞ。故に松陰もかく信じてゐた様である。それを「凡そ人臣たる者未生の前より君恩に生長し、一衣一食より一田一廬より君恩に非るはなし。況や其重録高位を世々するをや。身體髮膚父母の賜ふ所云ふも、父母祖先より皆君恩に生長する所なれば、頂より踵に至る迄皆君の物に非るはなし。」(一四九)云。君恩一元の國家では君主よりは國土人民皆君主のもの、神祖より託し給へる「おほみたら」云として生みの親心を繼いで養ひ育て教へ給ふ。臣民よりいへば、一切は君恩の所與にして、君主あつて我の存在が與へられるのであつて、君への忠義も君のものなりと知りてするのでなく、君德顯現のために生きる國民なれば、唯詔のまゝに動くといふ密接不離の内面的關係にある。又我國體に於ける君臣の義を嚴格に規定して神聖不可侵の面を強調してゐるのに「天子は誠の雲上人にて云々」(一三五)とある。かく松陰の國體觀は、天皇に屬する祭祀政治のことは殆ど云はず、唯一筋に臣民道を歩まんとしてゐる。「瞑目して此身根本の來由を思へば感激の心油然而生じて興り、報効の心勃乎して生ず……直諫極論面折廷爭せば吾罪を免がるべきか云、誠心坐ろに已むこと能はず。此即ち義なり、此即ち仁なり……特に其尊卑懸隔にして親愛父子の如きを得ざるを以て義と稱し、是が宜きを制するのみ」(一四九)と彼の覺悟が闡明である。

かくして國體論の大要を述べたが、之を當時の時勢に照して具體化せんとの直接的な論はないが、一般的論として「若

し夫征夷大將軍の類は天朝の命する所にして、其職に稱ふ者のみ是に居ることを得。故に征夷をして足利氏の曠職の如くならしめば直ちに是を廢するも可なり、……赫々たる天朝天日の嗣宇内に照臨しますに天朝の命を奉ぜずして擅に征夷の曠職を問はんならば所謂……春秋無義戰者なり。天子の命を奉ぜずして敵國相征するは何程の正義に依る云ふことも義戰に非ず」(三七)と、幕府の存在を如何に見たかは之でも窺ひ知られる。松陰は國體なる語を至る所に用ひるが、之を二義に解し、幕府を論ずるときは時務國威の方面より、我國の精華をいふときは君恩一元觀からするのである。後者の立場から罪を巨室に得給ふ等と云へる筈はない。

四、教 育 論

最後に教育のことを論ずるが、之は本書の目的ではない。教育のことは「吾黨の無學無識の及ぶ所に非ず。……然れども幽囚廢錮の久しき少しく自得する處ありて平生の志を償ひ、且他日恩赦の日に當つて幸にして未だ死せずば此事未だ必ずしも全く已矣と云ふべからず」と、望を將來に残してゐる。併し思へば「講孟餘話」の成立そのものも教育的精神の現れである。この中に現れたる教育思想なり方法を二三拾つて見よう。

先づ教育の目的は、東洋人では學問の目的といふ形で表現されるから既に前項で盡くされてゐるが、松陰の言葉を引用せば、「人々生れて人たるの所以を知り五倫を明かにし、皇國に居ては皇國の體を知り、……以て根基を建て、扱其上にて人々其職掌を治むべし……」(二三八)と、五倫は人の道、國體を知るは人の道の具體的、生活原理の獲得で人間生活の根基にして、かゝる人は實徳の人なり。又職掌を治むるは生活内容の充實で、實材の人なり。かゝる人を教育するのが教育であるといふ生きた教育であつて文化主義的教育ではなかつた。故に「君恩と教道と善く見ざれば二本となるなり」と云つた所以である。

教育の目的達成の根本豫想は人間性に教育實現の可能なりやが問題なるが、之に就ては、性善を篤信し、孟子では惡の起源を説く要なしを辨明してゐる。篤信の態度を孟子の四端説を事實的にその端緒が発見せられ、又自らの反省と修養が善心の萌芽を存養擴充して性善を自證するので、教育可能の基礎は修己で、之に即して直觀せられる性善の篤信なりといふ。松陰は何事も事實的實驗的であつた、「人心の根本を尋ね出せば仁の一字盡せり。義は即ち人の行く所、人の行く所即ち義なり。君子小人ともに日々行く所義に出でざるなし、若し義に非ざれば必ず今日が通用せざるものなり」(一六〇)を信に徹底してゐる。故に松陰は「余寧ろ人を信するに失するも誓つて人を疑ふに失することなからんを欲す」といふ。

松陰は個人的差異の點は論じないが唯正學を目標としての努力の結果を「凡そ學問の道死而後已」と限界を示してゐる。

教育は内面的覺醒を個々人に於てなさしめるもので、當然教育的環境が重要條件となる。

涵育薰陶しその自化するを俟つのが教育の祕訣で、不中不才者、片意地者、獮者狂者、外形的にでも學問せんとして來る者はすべてを入れる教育愛、人性善の篤信が教育の根本豫件なりとした。

最後に師道に就いて見るに、師弟の關係は教育者の方で外形上尊大を装ふことも到底師道は維持されない、「故に師道を興さんならば妄に人の師となるべからず、又妄に人を師とすべからず、必ず教ゆべきことありて師となり、眞に學ぶべきことありて師とすべし、熊澤了介の中江藤樹を師とするが如きは師弟共に各其道を得るこいふべし」(七四)と、之師としては自得あり、又必ず教ふべき必要ありを感じねばならぬ。

弟子としては「師を求めざるの前に先づ實心定まり實事立つて然る後往いて師を求むべし。凡そ學を爲す要旨爰にあり。思ふことありて未だ達せず、爲すことありて未だ成らず。是に於て憤悱して學を志し、而して師を求む。是實事あり。

りこいふべし。師を求めて後學び、學びて後行ふ。是皆虛事なり」(二二九)ミ、青年教育の場合を述べてゐる。

「道は古聖賢大抵言ひ盡せり。今の學者多くは其書を觀て口眞似をなすのみ……然れば師弟共に諸共聖賢の門人ミ云ふ者なり。同門人の中にて妄に師ミ云ひ弟子ミ云ふは第一古聖賢へ對して憚多きことならずや」ミ、自らは遙か孔孟の道統を繼承せんミの一大發心に於て勉學努力し、天下後世を任ミして同囚や青少年に呼かけてゐる。その宏遠にして眞摯なる抱負ミ謙虛なる態度は、實に自らは師なくとも、而もよく師ミして仰がるゝことが出來たのである。

以上の如く、不備乍ら松陰の講孟餘話に現れた思想の一端を論じて來た。松陰は佛教には厚意を持せざる儒者なるが、彼は君臣の大義を論じ、至誠以て一貫し、一身を君國に捧けて悔なき忠勤の龜鑑ミ仰がるべき人であつた。他山の石ミして何らかの參考ともなれば幸甚の至りである。